

【主催】 研究集会「文学とナショナリズム」実行委員会

【共催】 大阪公立大学大学院 文学研究科 文化構想学専攻 アジア文化学専修
大阪公立大学大学院 文学研究科 都市文化研究センター（UCRC）

【後援】 龍谷大学社会科学研究所付属 安重根東洋平和研究センター

【会場】 大阪公立大学 杉本キャンパス
高原記念館 学友ホール（対面開催）

参加無料（どなたでも参加できます）要・事前申し込み

(<https://forms.gle/wYhrhBsoYoqwrYAZ7>)

文学と ナショナリズム

12.9 13:30～
[Mon]

基調講演：田口 律男（龍谷大学）

「夏目漱石とハルビン事件—『門』の内と外—」

研究報告

：山本 勇人（大阪公立大学大学院 文学研究科 博士後期課程）

「十五年戦争期の文学とナショナリズム」

：金 昇淵（大阪公立大学大学院 文学研究科 特任助教）

「一つの言語は一つの言語ではない——日本（語）文学の越え方」

質疑応答・ディスカッション：上記3名＋参加者

司会進行：木村 天使（佛教大学大学院 文学研究科 博士後期課程）



QRコードからお申し込み下さい

【開催概要】研究集会「文学とナショナリズム」

〈ナショナリズム〉は、民族主義・国家主義・国民主義・国粹主義などと訳されるが、その定義は曖昧かつ複雑である。しかし、近代の国民国家の成立と深く関係していることだけは疑いえない。ネーション・ステートとしての日本が、資本主義世界システムに攻囲されながら、さまざまな制度を通して「単一」の「国民」を創り出してきたプロセスは、たんなる歴史の一断面ではなく、現在にまで影響を及ぼしている。そして、個人の身心に深く結びつく〈文学〉の領域もまた、さまざまなネーションの機制と絡み合い、共鳴してきた。明治期における「国民文学」の形成、昭和10年代の戦時下における国家と実存をめぐる言説、そしてグローバリズム・多言語空間を前提とした現代文学。それぞれの時代のなかで、ときに国民国家を補完し、ときに相対化してきた文学作品が、いまわれわれに問うものとはなにか。個人の分断と孤立が進行する現代社会のなかで、新たな包摂の論理に絡め取られないためにも、言語表象されたナショナリズムの諸相を探究し、その正負の両面を見つめ直す。

【講演要旨】田口律男「夏目漱石とハルビン事件—『門』の内と外—」

「文学とナショナリズム」という問題設定は、いささか時代遅れかもしれない。モノ・ヒト・情報・資本が世界中を駆けめぐり、私たち自身もその一部となって移動しつづけるグローバリズムの時代において、「文学」も「ナショナリズム」も液状化し、多様化しつつあるのが現状ではないか。とはいえ、ネーションが未完のプロジェクトである以上、私たちの身心には、なにがしかのネーション的要素が書き込まれ、上書きされることは避けられない。

夏目漱石（1897-1916）は近代日本を代表する知的エリートではあるが、経済的には不安定な小市民（プチブルジョワ）の一人であったと言える。前期三部作の一つである『門』（1910）には、姦通に近いかたちで結ばれたある夫婦の閉ざされた日常が描かれている。と同時に、漱石自身がニアミスしたハルビン事件（伊藤博文暗殺事件）が不透明なかたちで影を落としている。『門』のテキスト分析を通して、「文学とナショナリズム」の動的な関係を、歴史的現在の問題として捉え返してみたい。



講演者プロフィール

田口 律男（たぐち・りつお）

1960年延岡市生まれ。

広島大学大学院文学研究科博士課程（国語国文学専攻）単位取得退学。

現在、龍谷大学経済学部教授。著書に『都市テキスト論序説』（松籟社、2006年）。共編著に『漱石文学全注釈10：彼岸過迄』（若草書房、2005年）、『〈異〉なる関西』（田畑書店、2018年）など。

アクセス：大阪公立大学杉本キャンパス 高原記念館 学友ホール

〒558-8585 大阪市住吉区杉本3-3-138

JR阪和線「杉本町駅」下車、東口すぐ

Osaka Metro御堂筋線「あびこ駅」下車、4号出口より南西へ徒歩約15分

構内地図：<https://www.omu.ac.jp/about/campus/sugimoto/>

※上記URL／右QRコード、地図上の「25」が会場です

